

パキスタンの雑誌事情 (特集 アジア地域研究と雑誌 -- 「コア・ジャーナル」を語る)

著者	山根 聡
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	198
ページ	35-37
発行年	2012-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004041

パキスタンの雑誌事情

山根 聡

●独立前から続く雑誌文化の伝統

パキスタンの雑誌は、英語とウルドゥー語による刊行物がほとんどである。パンジャービー語、スィンディー語、パシュトー語による刊行物も皆無ではないが、定期刊行物は多くない。

この雑誌文化は、パキスタン独立の半世紀前、二〇世紀に入って活発化した。一八四九年、英領期にラーホールがパンジャーブ州都に設定されると、英語やウルドゥー語で多くの新聞が刊行される、一九世紀末には、デリーの新聞の種類が六〇あったのに対し、ラーホールでは二〇〇種類の新聞が刊行され、ラーホールが北インドでのウルドゥー語メディアの中心地となった。二〇世紀に入ると、文芸誌『宝庫 *Makhan*』（一九〇一年）、児童向け週刊誌『花 *Phul*』

（一九〇九年）や女性向け週刊誌『女性文化 *Tahdhib al-Niswan*』（一九〇九年）が刊行されるなど、雑誌文化が開花した。『花』は一九六〇年代まで刊行が続いた。同誌に投稿していた若き作家たちは、のちに現代ウルドゥー文学界を牽引する作家に成長した。

一九四七年のパキスタン独立後、政府刊行物は首都カラチーから刊行されたため、政治や経済の雑誌は現在もカラチーから刊行されているものが多い。これに対し、文学や評論など文化関連の雑誌は、カラチーと共に、ラーホールからの刊行が続いている。また、一九六〇年代に首都がイスラーマバードになると、政府関連の研究施設が同市に設立され、紀要もこの新しい首都から刊行されるようになった。現在イスラーマバードにある、政治に関する

研究機関の多くは対ソ連戦争時代に設立された。パキスタンの戦略的重要性が増し研究機関設立や成果刊行費用が西側諸国からの支援で潤沢にあったことが背景にあったと推測される。

ここでは、パキスタンの雑誌事情について、政府刊行物や紀要、一般雑誌等に分けて概観する。

●一般雑誌

パキスタンの内政や外交を知るうえで入手しやすい一般英字誌は、『ニューズライン *Newsline*』と『ヘラルド *Herald*』であろう。いずれも月刊で、カラチーから発行され、内政、外交、経済、文化などさまざまな分野を扱う。また『Friday Times』は週刊新聞で、ラーホールから刊行されているが、主に社会問題等を扱う良質の新聞として知られる。同紙のウル

ドゥー語版『この頃 *Ajkal*』も知識層に広く読まれている。

経済では、カラチーから一九八二年に刊行された週刊誌『*Pakistan & Gulf Economist*』が良質の雑誌として評価されている。

軍事関連の雑誌としては、一九八五年以来、カラチーから刊行されている月刊英字誌『*Defence Journal*』 (<http://www.defence-journal.com/>) が有名。

カラチーから刊行されるウルドゥー語週刊誌『世界の新聞 *Akhtar-e-Jahan*』は一九六七年ころに発刊され、現在も圧倒的な人気を誇る。読者欄、政治、国際情勢、特集、スポーツ、連載小説、読み切り小説、新案内、占い、夢占い、星占いのほか、結婚式や新生児の投稿写真などあらゆる要素を含み、最近では日パキスタン人のエッセイも掲載されている。

●政府刊行物等

年鑑ものとして『*Pakistan Year Book*』がカラチーから刊行されている。近年では類書も見られるが、パキスタンの全般的な情報を得るうえで、まずは手元に置いておきたいものである。『*The All-Pakistan Legal Decisions*』は、一九四

九年来刊行されている月刊の法令集である。

国語問題では、国立国語アカデミー Mugtadira Qaumi Zaban から、月刊誌『ウルドゥー新聞 Akhbar-e Urdu』が刊行され、ウルドゥー語の専門用語の造語法や、世界各地でのウルドゥー語教育の実態、あるいは書評などが掲載されており、パキスタン国内での言語問題について詳細な情報を得ることが出来る。パキスタン文学アカデミーは不定期で『文学研究 Adabiyat』を刊行している。

●紀要集

パキスタンでは、二〇〇〇年代前半のムシャッラフ政権下、高等教育委員会 Higher Education Commission の指導のもと、高等教育機関に関する改革がなされた。その際、紀要については、厳密な査読制度を採用することなどが刊行費支援の条件となった。編集委員会や査読者には外国人研究者の参加が奨励されている。査読の厳格さには雑誌・紀要によって差があることは否めないが、研究活動の成果公開に一定の基準を確立したことは評価できる。

政治関係の紀要としては、一九

九九年ごろ設立されたイスラームバード政策研究所 (Islamabad Policy Research Institute : IPRI) が最も精力的な活動を行って

おり、年二回発行の雑誌『PRJ Journal』、国際関係に関連した特集である『PRJ Paper』そして様々なトピックを選んだ論集とした月刊誌『PRJ Facfile』を刊行させている。内容は内政、外交、国際関係、経済など充実している。『UN Peace-keeping Operations and Pakistan』(二〇〇六年一月号)、『Pakistan's War on Terror』(二〇〇六年二月号)、『South Asian Free Trade Area』(二〇〇六年六月号)、『Pak-Afghan Relations 2005-07』(二〇〇七年二月号)、『Pakistan-India Peace Process』(二〇〇七年三月号)、『Pakistan-Russia Relations』(二〇〇七年六月号)、『Inflation』(二〇〇八年六月号)などがある。特集号としては、セミナー等の報告や選挙結果をまとめたものなどがある。二〇一一年冬号で二四〇号を刊行しており、これは <http://ipripak.org/facfiles.shtml> で見ることが出来る。

政策研究所 (Institute of Policy Studies) が隔月刊する『Policy Perspectives』もまた、論集のほか、

特色あるテーマでの雑誌を刊行している (<http://www.ips.org.pk/>)。同研究所は対ソ連戦争が始まった一九七九年に設立された。『アフガニスタン特集』(二〇〇八年五月号)など、内政、外交、国際関係、宗教問題等についての論考を扱っている。同じくイスラームバードにある戦略研究所 (Institute of Strategic Studies) <http://www.issi.org.pk/> は、季刊誌『Strategic Studies』を刊行している。地域

研究研究所 Institute of Regional Studies は一九八二年の創立以来、季刊誌『Regional Studies』を刊行し、特に南アジア、中央アジア、中国、中東などパキスタンの周辺地域に関する論考を中心に扱う。月刊誌『Spotlight』は、特集号として刊行されている。パキスタン地域のメディアが扱った記事を扱う隔週の『Selections from Regional Press』、特集を組む年刊『Focus on Regional Issues』、地域情勢に関する論文を集めた『Regional Perspective (Spotlight on Regional Affairs)』など、各種の雑誌を刊行するほか、Monograph Series も不定期で刊行している。

ラーホールのパンジャブ大学 University of the Punjab から二一

回刊行されている『Journal of the Research Society of Pakistan』、同大学の Centre for South Asian Studies から一九八四年から、年二回刊行されている『South Asian Studies』もまた、パキスタン政治研究では欠かせない。同センターは、月刊誌『South Asian Minority Affairs』も刊行している。

学術誌では、Pakistan Historical Society が一九五三年から刊行している『Journal of the Pakistan Historical Society』がある。経済関係では、パキスタン唯一の開発経済学会 Pakistan Society of Development Economics が発行する季刊誌『Pakistan Development Review』や、Lahore School of Economics が年二回発行する『The Lahore Journal of Economics』がある。パンジャブ大学の経済学部は季刊誌『Pakistan Economic and Social Review』を刊行する。また、University of Karachi の School of Social Science が発行する『Journal of Social Sciences and Humanities』が、不定期ながら研究成果を刊行し続けている。また、同大学の Applied Economics Research Centre は、一九八二年から年二回刊行『Pakistan Journal of

Applied Economics』を出している。
National Bank of Pakistan の
Economic Research Wingが隔月
刊の『Economic Bulletin』をカー
チーから刊行している。State
Bank of Pakistanは、ウルドゥー
語で逐次報告書を刊行している
([Pakistani Mu 'aishat ki Kafiyat
パキスタン経済の特徴])。これは、
State Bank of PakistanのExternal
Relations Department (Publica-
tions Division) に発注できる。

●文芸誌など

文学関係では、『絵Nugush』、軽
妙な文学Adab-e-Latif』『新月
Māhe-Nau』などの文芸誌がある。
文芸誌の歴史は古く、『軽妙な文
学』はパキスタン独立前の一九三
五年に創刊された月刊誌で、現在
も不定期ながら続いている。パン
ジャーブ大学オリエンタル・カ
レッジから刊行される『Oriental
College Magazine』はパキスタン
の国語ウルドゥー語の文学を中心
にアラビア語、ペルシア語、パン
ジャービー語などの諸言語および
その文学に関する碩学の研究論文
を刊行してきた。ウルドゥー文学
研究科は『こだまBarayati』を年
二回刊行している。パキスタン最

古の研究機関ガヴァメント・カ
レッジ大学Government College
Universityの『ラーヴィー川Ravi』
を刊行している。イスラームマ
バードの国立現代語大学National
University of Modern Languages
はウルドゥー語の研究雑誌『調査
研究Daryafat』および『研究の文
学Tahqiqi Adab』を刊行、同じく
イスラームマバードにある国際イ
スラーム大学も紀要『水準
Mejār』を刊行している。カラ
チー大学からは、ウルドゥー語の
紀要『紀要Arifa』が刊行されて
いる。スィンド州ハイダラーバ
ードに隣接するジャームシヨロー
にあるスィンド大学ウルドゥー文
学研究科は、不定期ながら
『Tahqiq』を刊行している。同州
ハイルプールのシャー・アブドゥ
ルラティーフ大学Shah Abdul La-
hf Universityは紀要『ダイヤモン
ドAlmas』を刊行している。

●政党関連

パキスタンの政党の機関誌には
パキスタン人民党とイスラーム党
のものがある。人民党はウル
ドゥー語誌『不屈の精神Sitiqat』
を、イスラーム党はウルドゥー語
誌『クルアーンの解釈者

Tarjuman al-Qur'an』を刊行して
いる。後者に掲載される論文は、
パキスタンにおけるイスラーム主
義者の主張を理解するうえで重要
である。編集長は一九八〇年代の
ズィアーウル・ハク政権時代に入
閣を果たした経済学者、フルシー
ド・アフマド氏である。

●雑誌講読での留意点

一九八〇年代のズィアー政権下
では、イスラーム化政策のもと反
イスラーム的なメディアに対する
弾圧があり、政府に批判的なメ
ディアが反イスラーム的であると
指摘される場合もあった。

現在パキスタンでは、イスラ
ームに対する冒瀆や、政府による一
時的な取締まりを除いては、比較
的自由な発言が可能となってい
る。ただし、パキスタンの場合、
政権が交代すると政府系機関の
トップなどが政権党支持者に代わ
る場合があり、雑誌の内容も現政
権や政党を支持する内容になる場
合がある。最近の人文系の政府機
関の刊行物は、故ブットー首相一
族を賛美する記事が多く掲載され
ている。それぞれの時代を反映す
る点では興味深いし、首相一族に
ついての資料を集めるうえではあ

りがたいが、内容に中立性を欠け
る点は常に注意しておきたいこ
ろである。

●パキスタンの英語

余談だが、九・一一以降、欧米
への渡航が困難となった中東の若
者が、英語を学ぶためにインド、
特にプネーに留学している実態を
調べたことがある。近年、中東や
アフリカの学生のみならず、東南
アジアやネパールなどアジア各地
から、比較的安価な学費と生活費
で高い英語力を習得できるインド
は、留学先として人気を集めてい
る。つまり、インドが植民地時代
の遺産である英語運用能力を、学
生を集めるツールに利用してい
るのだ。それほどに南アジア地域で
は英語が浸透しており、新聞や雑
誌等のメディアで用いられる英語
は「しっかりとしている」。そのこ
とは、パキスタンの場合でも同様
である。パキスタンの英字新聞、
雑誌などの英語もまた、インド同
様しっかりとしたものとして定評が
ある。同国の治安が安定すれば、
中東など海外からの留学生を集め
ることになるだろう。
(やまね そう／大阪大学 世界言
語研究センター 教授)